

## 教化学研究集会講演

# お自我偈の中の久遠の仏さま

(立正大学仏教学部教授) 庵谷行亨

ただいま、ご紹介いただきました庵谷でございます。立正大学で教鞭を執っておりますが、仏教学部の教授クラスの中では最年少でございます。教学についての担当ではございますけれども、若輩者でございますので、その点はお許しをいただきたいと思えます。

ご当地の所長さんのほうから、早い時期から繰り返し、本日のテーマについてお話をするようにということで、熱心なご要請がございました。本日お手元にお配りさせていただいております資料三点のうち一点は、私が作成は致しましたけれども、その内容は所長さんのほうから、こういう内容でお話をしてもらいたいというご要請をいただいたものでございまして、所長さんのお話を私なりにまとめたものでございます。こちらを中心にお話をさせていただきますと考えております。もう一点はお自我偈部分の現代語訳を添付をさせていただきますいております。

皆様方が出欠のご返事をなされた中に、質問をお書きになっております。そのご質問についても、私のお話をさせていただきます。いただいた後に、私の答えられる範囲で申し上げたいと思っております。

そして、最後、休憩時間の後が、今ご案内がございましたように質疑応答ということで、本日のお話に関連致しまして、何か皆様のほうでお話ございましたら承りたいと思えます。こういう手順でお願い申し上げます。

お手元に既にお配り頂いております資料をご覧ください。この資料は、今申し上げましたように、ご当地の所長さ

んのご質問事項です。質問が全体で八問ございますけども、関連事項がございますので、重ねて申し上げることがあります。それもお許し願いたいと思います。

タイトルに、お自我偈の中の久遠の仏さま、とあります。どうして、お自我偈というのかというと、それは皆様ご存知のように、その経文が、「自我得仏来」で始まるので自我偈です。偈とはどういう意味かというと、詩<sup>うた</sup>です。詩文<sup>しぶん</sup>という意味です。皆様はお経をお読みになる方が大多数だと思えますが、お経は、文章として大きく二つに分かれています。一つは長文のもので、それから、偈になっているものです。自・我・得・仏・来と一句が五つの文字で構成されております。本日の資料の、後ろのほうを見ていただきましたらわかります。五つの文字で繋がっています、これが詩文、詩ですね。この詩のことを偈というふうに言っています。これは正しくは、偈頌<sup>げじゆ</sup>というのですが、これを通称、偈と呼んでいるわけです。

ですから、如来寿量品も、大きく言えば散文という文章、普通の長文で書かれてる部分と、それから詩文で書かれている部分があります。この自我偈が寿量品のすべてではなくて、その前に長い文章があるということは皆様ご存知の通りですね。寿量品の後ろの部分、これが自我偈といわれているものでございます。

その教えの内容からして、日蓮宗では特に、重要視いたしているものでございます。ですから、お経を拝読する時に、このお自我偈を中心にお読みすることが非常に多い、ということになります。

今申しましたように、自我偈という言葉は、冒頭の二文字を取っているのですが、内容からいうと、これは、久遠偈と言っています。久遠偈という名称は内容でいっているわけです。この後出てまいりますけども、久遠の仏様のご説かれています、だから、これを久遠偈というふうに言っているわけです。

普通、私達が言っているのは、冒頭の二文字を取ったものであるということになります。

それでは、本題の、質問事項に入っております。Qの1です。なぜ、日蓮宗ではお自我偈が大切なのか。

これは基本ですね。Aとあるのは回答部分です。この部分が、本日お話し上げることの全体に及んでいるのでございます。そのことを繰り返して、その後も説明しているわけです。久遠の釈尊が説かれているから、というのが回答なのです。

その内容について、そこに四点の事柄を説明しています。

一つは仏様のこと、即ち、久遠の釈尊は、諸仏の中心です、ということですが、久遠の釈尊は全ての仏様の中心の仏様です。全ての仏様は久遠の釈尊から生まれ、久遠の釈尊に帰一するのです、ということ。それが諸仏の中心という意味です。その久遠の釈尊が説かれている。

諸仏というのは諸々の仏様です。皆様方も色々お聞きになるように、例えばお釈迦様が居られるとか、或いは、阿彌陀様が居られるとか、大日如来が居られる、薬師如来が居られるというふうに著名な仏様が、仏教の教えの中にくさん説かれています。それらの仏様、これが諸仏、諸々の仏様です。

それら諸々の仏様と、寿量品に説かれている仏様、釈尊とどのように関連しているのか、と申しますと、それが、そこにありますように、全ての仏様は、久遠の釈尊から生まれ、久遠の釈尊に帰一するということです。久遠の釈尊と諸仏とはいったいどういう関連性をもって統一し、帰一するのかというと、久遠の仏様が、諸仏を包括して居るわけです。ですから諸仏は、久遠の仏様のいわば分身ですね。姿を変えたもの、ということになります。諸仏は久遠の仏様から現れたもの、久遠の仏様が姿を変えたものです。あくまでも、久遠の仏様が中心です。久遠の仏様が、あらゆる人々の救われるべき状況、人々が救っていたきたいと願っている状況、それに応じて現れて来られる。

阿彌陀様のご縁を持つ方も居られます。阿彌陀様のご縁をもって仏教に入っていく。信心に帰入していく。と、それが、やがて、本体の仏である久遠の釈迦牟尼仏に帰一していく。ですから、阿彌陀様の信仰だけで生涯終わられる方もあるかも知れないし、そこから本来の仏様のほうに信心が移っていく方もおられるかも知れない。それは

今生こんじょうでそうなるかも知れないし来世かも知れない、その先の次生になるかも知れない、次の生になるかも知れない、ということになります。

そういうふうには、仏様は、一つの統一の中で、あらゆる姿をもって人々を導いて行かれる。

その次にまいります。次は教えです。久遠の釈尊の教えは諸経の中心である、ということですが。自我偈は久遠の釈尊が説き明かされる、久遠の仏様の話です。久遠の仏様は、法をお説きになります。その久遠の仏様のお説きになった法は、久遠の法ということになります。そうすると、諸仏の説かれた法と、久遠の仏様の説かれた法とは、そこに大きな位置付けの違いが生じてまいります。それで、全ての仏様が説かれた全ての教えは、久遠の釈尊の教えから出たものであり、久遠の釈尊の教えに帰結する。これは先程の仏様のことと全く同じです。

阿弥陀様の教えがある、薬師如来の教えがある、いろいろな諸仏菩薩の教えがあるけれども、そういうような教えは、全て久遠の釈尊の教えから出たものであり、久遠の釈尊の教えに帰結する、ということになるのでございます。

第三番目は、久遠の釈尊の世界は永遠不滅である。これは浄土と申します。土というのは場所のことです。久遠の釈尊の世界は、消滅することのない永遠の浄土である。これを永遠の救いの世界と申します。

お自我偈に説かれた世界こそ真実の浄土である、真実の救いの世界である。

人がいるという場所があるということです。場所がなければ人は存在できません。我々の存在は、この後も出てまいります。時間と空間をもっています。居ると申すのは場所がなければ居れません。居ると申すのは、今という時間がないと存在しません。そういうふうには、時間と空間の中に存在がありません。

存在を、存在たらしめる一つの条件、それが土、場所です。土というのは場所のことでございます。

仏様の居られる場所のことを浄土と申しています。浄とはきよらかという意味です。

法華経では、我々の住んでいる世界を娑婆世界と申しています。この現実の世界ですね。我々の住んでいるこの現

実社会、これが即ち仏様の浄土だと法華経では説いているのでございます。

娑婆とは忍耐する場所ですね。忍土と言います。忍耐、耐え忍ぶ。耐え忍ぶ場所ということですよ。

何故堪え忍ぶのかというと、諸々の苦難があるからです。我々の住んでいるこの社会は、それぞれみんなが自分の欲望を持っていますから、欲望と欲望とがぶつかり合います。欲望は個人の問題もあるし社会の問題もある。集団もありますし、国もありますし、何々地域ということもありますし、色々な、それぞれの願い、要望がございます。それがぶつかり合います。必ずしも全てが満足することは出来ませんので、お互いにそれを耐え忍ぶことになります。それで忍土と言っています。

我々の欲望に満ちたこの世界、それこそが、まさしく仏様の浄土であるということが、お自我傷に説かれているのでございます。そして、この浄土が、永遠のお釈迦様がまします場所であり、そしてその永遠の仏様によって救い取られていく我々が住む場所である、というふうに説かれています。これが、真実の救いの世界、という意味でございます。

それでは死後どうなりますか。今生きているこの浄土と、死んだ後の浄土はどうなりますか、という問題が生じてきます。それは、日蓮聖人の考え方、日蓮聖人の法華経の浄土の受け止め方からすれば、この娑婆世界が永遠の浄土です。そして、死後に仏様のところに往く。専門用語では往詣という言葉を使っていますけれども、仏様のところに往くと考えています。今ここにいる浄土、そして死後に往く浄土です。我々が生きている間にいる浄土と、それから死後に往く浄土とは同じだというふうに考えているわけです。我々の相対的・物質的なこの社会の中では、居るということと往くということとは違うと考えますけれども、何処に往くかというと、それは仏様の理想の世界です。理想の世界とは何処にあるかというのと、それは、ここにもあるし、それから宇宙のどこにでもあると考えているわけです。

ところがですね、この娑婆世界が浄土であれば、我々は仏様を信仰しなくともよいではないかというように思いま



すけども、この娑婆世界が本当に浄土となるのはどういうことかというところ、それは、我々が仏様の教えを信じて、仏様と一体化することです。仏様と一体化するというのは仏様のお心に我々が帰入することです。帰入とは入り込むことですね。仏様の心に我々が入り込んで、仏様と一体になったところに、本当に娑婆の浄土が出現するのであります。仏様の視点から見れば、全てのこの世界は浄土です。ところが、その浄土を我々にとって本当の浄土とするのは、我々自身が仏様に対して信心をしなければなりません。

これを日蓮聖人は、本時の娑婆世界と仰ったのです。本という字は、皆様ご存知のように、例えば、三大秘法は本門の本尊です。本という字がついています。本とは久遠という意味です。永遠、或いは絶対とか、今の言葉でいえば本物とかですね、そんな意味で使っているのです。ですから、本時というのは、久遠釈尊の本当の時間という意味です。久遠釈尊の本当の時間とは、仏様と我々が一体化した時間です。仏様の慈悲の世界と我々の信仰とが一体となった、合致した世界、これを本時、と言っているのです。

そういうところに永遠の救いが成就する。そうすると現在も過去も未来もない、永遠の時間がそこに実現します。これは、歴史的時間ではなくて、宗教的感応の時間です。感応というのは、信仰者が仏様に信心を捧げ、仏様が我々に対して慈悲の救いを垂れてくださる、そういう、仏様と我々がまさしく心を通わせたこと。そういう時間、これが本時という時間です。

ですからその宗教的時間の中では、全ての時間がそこに包括されてしまう。そこに宗教的な救いが実現する。これが場所であれば、本時の娑婆なのでございます。

少し説明が難しくなりましたけれども、これが永遠不滅の浄土である、というようにお考えいただければよいと思います。

お自我偈は、今、先程申しましたように、仏様の永遠性を説くということが中心なのですけども、仏が永遠である

ということとは、仏様の教えが永遠であるということ、仏様が永遠であるということとは、仏様のお住まいになつて居る場所が永遠であることです。だから、仏様が永遠であるということは、教えが永遠である、場所が永遠である、という事になります。

その次に入ります。久遠の釈尊の救いは一切に及ぶ。永遠の時間、いつの時代においても。無限の空間、如何なる場所においても。久遠の釈尊は、普く一切を救い取る。永遠の命を持つ仏様が、永遠の教えをお説きになり、そして、永遠の浄土をお示しくださる。そうすると、その仏様による救いは、永遠の救いということになります。

永遠というのは、時間と空間を超えるということですから、過去永遠、未来永遠。過去においても現在においても未来においても変わることはない。過去現在未来とは、過去世、現在世、未来世と言って、仏教では三世と呼びます。過去現在未来、即ちいつの時代に生まれ合わせても、どこの場所に生まれ合わせても、仏様は、普く一切の人々を救い取つてくださる、これが救いということなのでございます。

即ち、お自我偈に説かれた救いこそ真実の救いである、ということになります。

これで、だいたい、お自我偈の大切な意味がご理解いただけたと思います。仏様、教え、浄土、救い、ですね。この四点がおおまかに言えば説かれている。そこで、大切なのだということになります。

そのあとは、それぞれ具体的に設問をしております。これは繰り返しになります。

Qの2に入ります。お自我偈に説かれている久遠の釈尊とは。今度は、仏様についての質問です。

歴史上の釈尊が久遠の釈尊、というのが答えです。ここが大切なのです。歴史上の釈尊が、私は久遠の仏ですと仰つたことが大切なのです。

他の經典でもそれぞれ、例えば、仏様が私は永遠であります、と説かれている經典は沢山あります。法華經は歴史上の釈尊が、私は永遠ですと仰つたのです。それが、他の經典との違いです。

お自我偈の中では、歴史上の釈尊が、自ら、我が身がそのまま久遠の仏である、と説かれた。歴史上の釈尊は有限の存在です。有限の釈尊が、そのまま、無限の存在だと仰ったのです。有限が無限だと言う。それはどういう意味を持つか。歴史上の釈尊は、肉体を持った仏様です。肉体を持った仏様というのは、人間の姿をもって現れた、ということですね。そうすると、人間の姿を持って現れたというのは、当然、姿を持つものは必ずいつか滅するわけですから、有限です。生まれ、死ぬ。生死を現すわけです。それは有限です。歴史上の仏様は、人々と時間と空間とを共有されます。人々と共に生きる。人々と共に生活する。人々と共に生きるとは、人々の生活に即しているということですから。そのことを通して、仏様は、慈悲の救済活動をなさいます。単に經典に説かれている仏様が私は永遠に救うと言っているのではなくて、実際にこの世に現れた仏様が、その肉体をもって救済活動を行われた、ということなのです。そして、慈悲を實踐されたということなのです。

久遠の釈尊は無限の存在です。無限の存在というのは、これは当然、永遠の仏様を言っているわけです。そうすると、永遠の仏様は永遠に人々と時間と空間を共有することができます。ところが、この仏様が肉体を持たない場合は架空ですよ。お自我偈の仏様は、永遠の仏様が、肉体をもって、人々と共に生活をされる。それは、無限の釈尊がそのまま有限の存在として現れる、ということなのです。人々を救うために、無限の釈尊が有限の釈尊として現れた。

仏様は、大きく言うと、三つの側面をお持ちになるのです。どうして仏なのかということ、仏というのは、ご存知の通り仏陀のことです。仏陀とは、覚者です。覚者とは目覚めた人、悟った人という意味です。目が覚めた人。仏陀とは目が覚めた人です。何故目が覚めたのかというと、それは真理を悟ったから、自分自身が分かったのです。普遍的真理を悟ったのです。仏様は普遍的真理です。普遍的真理というのは、時代が変わったから変わるとか、場所が変わったから変わるといふものではありません。いつの時代においても、いかなる場所においても、変わることのないものです。普遍的真理をお悟りになった。ですから、仏陀といわれている。仏陀は目覚めた人です。如来というの



は如から来た人です。如とは真如です。真如が来た。これが如来です。真如というのは、今の言葉では真理と言っていますけれども、厳密に言えば違う。言葉では表現できない、人間の言葉では表現できない、そういう世界です。妙なるものです。それが真如です。このように、一つは、仏様は普遍的真理です。普遍的真理は今言ったように時空を乗り越えます。時間空間を乗り越えますから、これが永遠性なのです。仏様の永遠というのは真理性なのです。仏様は真理だから永遠なのです。

それから次に修行と結果の仏様です。仏様は目覚められた。どうして目覚められたのかというと、普通は、修行をして、その結果目覚められた、というふうに考えているわけです。修行して目覚められた。だからこれを、因と果と言っているのです。宇宙は全てこの因果関係で成り立っています。これは流れですね。結果を生むものが因です。ですから、必ず因から果へと移ります、因があつて果があるのです。

果を仏様とするならば悟りに至る修行が因です。最もこの世の中で尊い結果が、仏になることだからです。これは仏教の価値観です。仏教の価値観で最も尊い結果は、仏になることですね。皆様もご回向なさる時に、仏果という言葉をお使いになる。仏果とは仏ということですね。そしたら、仏になるためには仏になる原因があります。それが因です。原因とは修行です。修行をすることによって仏になるのです。だから歴史上のお釈迦様も修行をなさつて、菩提樹という木のもとで悟りをお開きになった。修行をして、その結果仏になる。それが因果です。

ですから仏様は、修行と結果を同時に持つておられるのです。だから仏様は仏となるための原因としての修行の功德を常にもつておられる。

修行と結果ということは、仏様の一般論としての話です。

お自我偈に説かれている久遠の積尊は、久遠の修行と、久遠の仏様としての果徳とを同時にお持ちになつています。

それは我々には理解できない。なぜかという、原因があつて結果がある、とえば我々にも理解できるのです。こういうことしたからこういう結果になつたということは、我々にも理解できるので。ところが久遠の仏様は、久遠の原因と久遠の結果を同時にお持ちになつて居るのです。これをどういふふう理解するか、ということ。久遠の積尊はいつ仏になつたのですか、という疑問が生まれます。仏になつたという始まりがあれば分かるのです。

ところが、先程から申していますように、久遠の仏様は、歴史上の仏様でありながら、久遠の仏様です、と仰つたのです。そうすると、久遠の仏様はいつ仏様になつたのか。実は、久遠の過去から仏様なのです。久遠の過去から仏様ということは、いつ仏になつたという始まりはないのです。始まりがないのにどうして仏になつたの、と私達は考えます。何故ならば、原因があつて仏になつたのでしよう、原因がないのにどうして仏になつたのですか。

それは本来、仏なのです。この宇宙の真理、その真理そのものが仏様なのです。久遠の仏様はいつ仏になつたといふことはないのです。それが、この自我偈に説かれる仏様です。始まりがないなら因とは何か。修行とは何か。始まりのない仏様が、永遠の過去から永遠の未来に向かつて修行なさつて居るのです。それが仏様の修行です。だから、普通の概念ではもう理解ができないのです。即ち、永遠の仏でありつつ、永遠に修行をしつつある、これが久遠の積尊です。

では久遠の積尊はどんな修行をされているのかというと、これはお経の一番最後に出ていますように、毎自作是念です。常に自らこの念をなす、という修行をなさっています。全ての人に仏身を成就せしめたいという修行をなさつて居る。即ち、全てのの人々を救ひ摂とるといふ修行を、仏様は永遠になさつて居るのです。それが仏様の修行なのです。そういう因と果、修行と結果というものが、仏様の意味としてあります。

三つ目が慈悲の実践です。慈悲の実践というのは、積尊は永遠の修行をなさつて、永遠に私達をお救いくださるという事です。それを具体的に身を以てお示しになつたのが、歴史上の積尊です。これが、無限の積尊が有限の積尊

として現れたということなのです。

仏様は、この三つの功德をもつて、我々の前にお立ちになつて居るのです。これが、有限の仏が無限であり、無限の仏が有限であるということなのです。

そもそも、無限ということは、我々には理解できないのです。何故かという、我々は有限の存在ですから。頭の中では、なにか分かつてるように思うけれども、本当には分からない。

例えば、我々の知らない世界がありますね。人間がまだ説明してないものがありますよね。単純に言えばこの上に何かありますか。空がある。空の向こうは何ですか。さらにその先はどうなんだ。またその先はどうなんですか、と質問していくと、やがて、そこまではまだ説明されてないよとなりますね。そうすると、何かがあるかも知れない、でもどうなつて居るか分からない。昔の人の中には地球は四角だと思つた人もいた。地球を一周した人がいて、地球は丸いということが分かつた。地球は分かつててもその先その先と追求していくと分からない。永遠ということは私達には分かりません。今から一億年前はどうだったか、今から一億年後はどうなつて居るかといつても、想像はできるかも知れない、或いは科学的根拠のある部分は説明できるかも知れないけれども、それがほんとうかどうかは分からない。かも知れない、という世界ですね。

というふうに、無限なるものは私達には理解できないのです。それが久遠の仏の世界なのです。

そもそも、仏教を、我々が理解しようということじたいが限界なのです。我々が仏教を理解することは不可能です。限界と言えば身も蓋もありませんから、我々が出来る範囲で一所懸命頑張らしましょう、ということなのです。

それは何のためにしてるのかというと、それは私達が、本当の私達として生きるためです。私達が、本当の自分の命を見出して、本当に自分自身として生きるためには、仏様に尋ねるしかない。仏様の世界に自分の生きることの正しい道を感じるからです。尋ねることによつて、解決が得られるかどうかは分からない。解決が得られたと思う人も

いるかもしれないけれども、それが本当の解決だったかどうか分からないのです。そういう人生を私達は歩んでいきます。

久遠ということがもし分かるとすれば、それは信心です。久遠とは信心です。信心がなければ久遠の仏様は分からないのです。久遠の仏様は永遠仏です。永遠仏を信じる、永遠の救いを信じる、というのは、私達自身が、永遠の仏様の中に生かされているという喜びの中に生きていない限り分からない。

日蓮聖人が本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇と言われた本門の世界は、それはまさしく信仰の世界です。信心でなければ本門は分からないのです。もし分かるとすれば、それは頭の中で分かっただけです。観念的に分かっただけであって、ほんとうに自分の身体で分かっただけにはならない。それが、本門、即ち久遠ということなのです。

それでは次に、良医の譬えに入ります。このことは、皆様、寿量品をお読みになれば出てくることですので、ご存知のことと思います。

良医とは良いお医者さんということです。法華経が成立した時にはお医者さんがいた、ということが分かります。

法華経の成立は、だいたい紀元五〇年から一五〇年くらいの間であろうと考えられています。イエス様がお生まれになって後、五〇年から一五〇年くらいということです。仏教はもつと古いのです。仏教は今から約二五〇〇年程前です。ですから、仏教が始まって約五〇〇年から六〇〇年くらいを経過して、法華経が成立したであろうと考えられているのです。その頃、すでにお医者さんがいたのですね。

それからお経の中には長者が出てきますから、お金持ちがいたということも分かるのです。

お医者さんがお父さんであり、そのお医者さんの子供が我々である、という譬え話が出て来ます。良医は仏様、真実の仏様です。どうして真実の仏様かというと、この父親なるお医者さんは、子供に、お父さんは死んだよ、と示しておきながら、実には生きていた。死んだ父は生きていた、という話が出て来ます。真実の仏様は死なないのです。

死んだと見せかけるけれども死なない。

良医の子供は、久遠の釈尊の久遠の愛子です。これは、先程申しましたように、お自我偈の中で仏様は久遠の仏様だということをお明かされます。久遠の仏様が明かされるということは、父が久遠であるということ、そしてまた、その子供も久遠であるということが明かされたということになります。それを父子久遠と言っています。父が久遠であればその子も久遠です。久遠の釈尊の久遠の愛子です。一切の人々は、仏様の愛しい子供である、ということですね。これが、父子久遠ということなのです。

良薬は薬です。久遠の釈尊の最上の教え、題目・南無妙法蓮華経、これが真実の教えです。全ての教えは、法華経に帰結し、法華経の教えはお題目に帰結する。そのお題目のことを、寿命品では良薬と説いているわけです。良い薬。この薬を飲むことによって、お題目の救いに預かることができる。即ち久遠の釈尊の救いに預かることができる。

その次が、父の死。仏様のご入滅を表す。歴史上の釈尊のご入滅です。それは、お父さんが、毒を飲んで苦しんでいる子供を救うためです。私は用事があるからと言って旅に出て、旅先から使いの人がやって来て、あなたのお父さんは旅先でお亡くなりになりましたよ、と告げた。これが父の死です。ところが本当は死んではいなくて、お父さんはやがて帰ってきます。

どうしてお父さんは自分が死んだということを使いを遣わして子供に告げたかというところ、それは、父親がいれば、子供はいつまでも父親に頼って、そしていつかお父さんが自分の病気を治してくれるだろうというふう思う。自分で飲む、自分で薬を飲むということをしなさい。自分で服薬しない。自分に目覚めないで、いつまでも怠惰な心を起こし、依存心が強くて、お父さんがなんとかしてくれるだろうと思ってしまう。そこで、そのような考え方を誠めるために、お父さんはもういないんだよと、頼るべき人はいないんだよと自分で自覚させる。お経には、孤露にして恃怙



なしと書いてありますね。孤露とはひとりぼっちです。恃怙は頼るべき人がいない、ということ。頼るべき人がなくて、もうひとりぼっちになってしまった。救ってくれる人は医者のお父さんだから、お父さんがいなくなつたことを、孤独だと、ひとりぼっちだと言つたのです。それで目覚めて、お父さんが残しておいてくれた薬を飲む。そしたら毒病が治る。そこへお父さんが帰ってくる。

その次が親子の対面です。仏様と衆生との一体性、父とその子供との永遠性、真実の救い、真実の浄土がそこに説かれます。即ち、父は死んではいなかった。不滅の父です。死ということをおきながら、本当は死んでいなかった。不滅の父。それが、不滅の仏様。仏様は生ずることも滅することもないと日蓮聖人は仰っています。父が不滅であれば、その子供もまた不滅であるということになります。

我々は、人間として生まれたので、肉体を持つている。それはみな有限です。肉体を持つているものは皆、有限です。この有限を免れることはできません。ところが有限の中に永遠がある。有限の、歴史上の積尊が、永遠をお示しになつた。我々がその仏様に信心帰入すると、我々もまたその仏様の永遠の愛子となる。これは宗教的感応です。宗教的救いが実現するのです。物質的な救いではない。立派な家をもっているとか、経済的な悩みはないとか、そういうものではありません。精神的な救いです。宗教的な喜びの中に救いを見出していくのです。それが、親子の対面、仏様と衆生との永遠性ということなのです。

次に質問の三番目です。久遠の積尊とはどのような仏様か。

これは繰り返し返しになっています。答えは、永遠の命をもつた仏様です。永遠の過去から永遠の未来に向かって、常にまします仏様。

常にましますということは、仏様が常にいれば意義があるのではないのです。仏様が常にましますということは、我々と共にましますということです。我々に寄り添ってましますということ、これが私達にとって、仏様がまします

ことの意義なのです。仏様がただ長生きして、永遠に生きているだけでは我々にとって意味がないのです。仏様が永遠であることは、我々をお救いくださるから意味があるのです。常に我々と共におられるのです。そこに、永遠の救いが実現します。即ち、永遠の仏様が、永遠の救いを実現する、ということを行っています。

永遠の過去から永遠の未来に向かって、私達と深い因縁で結ばれている仏様。私たちの真実の父。先程、父子の久遠といいましたけれども、これは、父子の久遠の結縁ということなのです。久遠の結縁とは、永遠の過去から、我々は仏様と親子の縁を結んでいる、ということなのです。そういう覚えはない、と言う人もいるかもしれませんが、仏様が永遠の過去から仏様であったその時点から、我々は仏様と永遠の結縁をしていたのです。ですから、一切の人々は、普く仏様の子供として、本来存在しているのです。我々は既に仏様の子供として存在しているのです。

ところが先程の浄土の話と全く同じで、永遠の結縁をして、我々は仏の子供であるなら、もう別に仏になる努力をしなくてもよいではないか。もう仏の子供なのだから成仏しているんだと、こういうふうを考えてしまいますよね。それは仏様の救いの視点からすれば、全て仏の子供、この世の中は全て仏様の世界なのです。ところが、本当に、我々が仏の子供であるというのは、我々の信心のありようが問われているのです。我々にとっての、我々が仏の子供であるということの実現は、仏様のお心になつた信心をすることなのです。それを通して初めて我々は、仏様の子になるのですよ。ですから、それは、仏様の言われるところの道理と、我々の実際生きていく上での現実との違いなのです。我々はもう仏様の子だからと胡座をかいてしまいますと、その時点で墮落します。大乘仏教が墮落するのは全くこのことですね。大乘仏教が墮落するのは、この世の中は全て仏の世界だとか、我々も仏の子供だ、というふうを考えて、そこでもう終わってしまうのです。停止してしまうのですね。そうすると、我々は仏の子供だから何をしても仏の子供だということでは悪の肯定が始まるのです。

悪の肯定というのは、人間は本来、怠惰な生き物ですから、どうしても楽なほうへ、楽なほうへと身を落としてい

くのですね。そうすると、悪いことをしても、これは仏様の仕業であると、或いは暴力を振るつたのは仏様の子供だ、というように肯定してしまいます。そうするともう完全に、仏教が墮落していくということになります。即ち仏様の教えから離脱していくわけです。

それは、仏様の教えを受け止める我々の心掛けの問題なのです。それは仏様の責任ではなくて、仏様の教えを受け止める我々の誤り、ということになります。

お経には、獅子身中の虫と出て来ますけれども、こういうことをいうのでしょね。獅子というのはライオンですね。ライオンの身体の中の虫のことです。要するに、ライオンは百獣の王ですからどんな獣にも勝つけれども、お腹の中にいる虫によって倒されてしまう、ということ言ってるのです。

それはまさしく、仏教という偉大なる教えを、仏教の教えを信仰してる者、仏教者が破壊してしまう、仏教を倒してしまう、ということ言っているわけです。それは、正しく仏の教えを理解しないと、誤って仏様の教えを信受し弘め仏教を倒してしまう、ということ言っている、と思うのです。

それぞれの時代において、それぞれの国において、仏教の在り方は違いますけれども、常に、仏様の本意に帰るという努力をしないと、仏教そのものが揺らいでしまう。

皆様も現前にお感じになるでしょう。例えば中国においでになったり、或いは韓国においでになったり、台湾においでになったりしますでしょう。そういうアジアの仏教の人達と、日本の仏教の人達と、どういう違いがあるか。例えば、戒律を持っている仏教者と、日本のように、大乘の視点に立った戒律を持っている人達とは、同じ仏教でも全然生活様式や考え方が違うのですよ。そういう中で、仏教者として理解し合える点は一体何かということ考えないと、生活の中で具体的に戒律を持っている人達から見ると、日本の仏教は墮落した仏教だと言われるかも知れないでしょう。

それは何かというと、形の仏教と、精神で生きようとする日本のような大乘仏教の違いです。形で規制されてるよりも、むしろ、もつと大変なのです。組織の中で規制されている場合は、それを守っていればよいのです。

ところが、日本の仏教のように、大乘戒の仏教は、信心即持戒です。日蓮宗は題目信心です。題目の信心が戒律を持つことです。題目信心の中に全てが包括されてしまいますから、具体的にああしてはいけない、こうしてはいけないと言っているわけではないのです。題目信心の中に全て包括されるわけです。

そうしたら常に、自分が仏様に尋ねて、仏様からお聞きするしかないのです。そういう生き方をしなければいけないから、大乘仏教信仰者の身の処し方は厳しい、と思います。大乘仏教信仰者は自らを誠めなくてはいけない。

今のような国際化の時代は、国と国との間に境界がありませんから、いろいろな方たちが日本に来られる。日本の人達も海外においでのになる、それで、その品行、仏教者としての有り様が、常に世界の人達から見られていて、そして評価されている。よい評価もあれば悪い評価もあるかも知れません。そういうことです。ですから身を慎まなければいけないと思います。

そういうことがありますので、全ての世界は仏様の浄土である、全ての人々は仏様の子供である、ということ、間違つて理解しないで頂きたいということを申し上げるのでございます。

それでは、再び資料に戻っていただきまして、一枚目の一番最後の項目でござります。Qの四のところをご覧になってください。久遠の釈尊のはたらきは、ということろです。Aは、永遠の命をもった仏様は永遠に人々を救い取る、ということろです。これも先程申し上げたことの繰り返しです。時間を超越する。分かりやすくいえば時代を超越するという意味です。生ずることも滅することもない永遠の存在です。日蓮聖人は、過去にも滅せず未来にも生ぜず、と仰つております。日蓮聖人は、不滅不生と表現なさっています。生ずることも滅することもないという意味です。すね。



次が、空間を超越する。どこにでも存在する。どのような場所でも、仏様はましますということです。場所を超える。

その次が、常に人々と共にまします。常に人々に寄り添い、人々を導き、人々を救い取る。人々がそのことを気付いても気付かなくとも、仏様は常にそこにおられるのです。信仰なさる人もいれば、信仰なさらない人もいます。信仰していようがしていまいが、仏様は常にその人のそばに寄り添っておられる。そのことに気付く人は幸いですけれども、それに気付かないで生涯を終える人もおられるかも知れない。そのことを、よく気付いてくださいとお手伝いするのが宗教者の役割、お坊さんの役割です。

その次は自在に変現する。姿が変わる。姿が変わって現れる。人々に応じて種々に姿を変え、人々を導き、人々を救い取るのです。人々は色々な環境にいる。色々な個性がある。いろいろな願いを持っています。それらの人々の、それぞれの有り様に応じて、人々の願い、望み、悩み、それぞれの必要性に応じて、仏様は姿を現わすのです。それぞれが、どのように仏様に向かうのか、それによって仏様は、さまざまな対応をしてくださるのです。

先程申しましたように、観世音菩薩にご縁をもつ方がおられるかも知れないし、或いはキリスト教とか、イスラム教のご縁を持つ方がおられるかも知れないけれども、それらの宗教を通して、いつかは、法華経の久遠の積尊の教化にあずかる。他宗の、或いは他の国の宗教もまた、法華経の積尊の宗教に帰入するご縁となる。いつかはお題目の世界に帰入していく契機となるものです。ですから、それぞれの人達の望みに応じて、仏様は種々に姿を変えて人々を導いてくださる。

最終的な、お題目の救い、久遠の積尊の救いに導くのが、日蓮宗の教師の役割です。

絶えることのない救済活動。いつでも、どこでも、人々を救うために、慈悲に満ちた活動を続けておられる。仏様の、一切の人々に対する救済の活動は、常にやむことはない。人間の時間でいえば、二十四時間、三六五日、常時、



慈悲の活動をしておられます。

それぞれのご縁で、いろいろな人達がおられますけれども、特に、法華經にご縁をもつことは、お經にも説かれていますように、非常に、希有なこと、珍しいことです。なかなか法華經には遭い難い、と説かれています。ご縁をもつことが出来る人は、非常に有り難いことです。ですから、ご縁をもった人が、少しでも、そういう喜びの中に、他の人達を導き入れることが使命であると思うのでございます。

次に、Qの五でございます。歴史上の釈尊と久遠の釈尊との違いは。これも繰り返しになっております。

答え。歴史上の釈尊は有限の存在。久遠の釈尊は無限の存在。歴史上の釈尊は法を説いて人々を目覚めさせる。説法をなさる。有限の釈尊は、法を明かす。

人間の機能は、目、耳、鼻、これらを五根とか六根と言っています。そういう機能で外的情報を受け取ります。そうすると、その人間を救うためには、その人間の機能に働きかけなければならぬ。それで、仏様は人間として現れて、法をお説きになる。そして、人々を目覚めさせる。法に基づいた生活を実践して、人々に生きることの意味と意義を知らしめる。即ち、歴史上の釈尊が、実際に人間の姿で現れ、理想的な人間としての生き方をお示しになる。

日蓮聖人がお受け止めになった、仏様の法の実践者としてのお姿とは、仏様が法華經の行者として生きられた、ということです。お釈迦様の生涯については、いろいろな視点がありますけれども、日蓮聖人は、お釈迦様は、法華經を説くためにこの世に現れた、そして、法華經の修行をなさり、法華經をお弘めになり、法華經の救いを人々に実現しようとなされた、というふうに考えられたのです。そういうお釈迦様の生涯は、法華經の行者としての先例、先駆であつたのです。

そこで、日蓮聖人ご自身も、法華經を修行する者、法華經の行者としての生涯を歩んでいかれた。お釈迦様は、自分の生き方の先輩ですね。理想的な法華經信仰者の姿として、お受け止めになられたのでございます。

それが、法に基づいた生活を実践して人々に生きることの意味と意義を知らしめる、ということです。

具体的には、例えば、仏様が一切の衆生を成仏せしめたとか、或いは、自分の一族を教化なさったとか、それらを通して、仏様は真の孝養をまつとうされたと仰っています。それが歴史上の釈尊です。

久遠の釈尊は、無限の釈尊が有限の人格をもつて出現したのです。このことは前に出てきました。真理の体現者。如来は真如から来るのである、と申し上げた。

絶対の存在。生じることも滅することもない、永遠の時間と永遠の空間を超えていく。永遠の教主。諸仏の根源。人々を導き、人々を救う。即ち、永遠の導きと永遠の救いを実現なさる方、これが久遠の釈尊です。

この両者が一体の仏であると自我偈、即ち寿量品ではお説きになつていたのでございます。

Qの六、久遠の釈尊は他の仏様とどう違うか。

A、久遠の釈尊は真実の教主。二つのことがその後に書いてありますが、久遠の釈尊と他の仏様との違いです。

久遠の釈尊は、私達の真実の父であります。これは先程出てまいりました良医のたとえから分かりますように、永遠の父、この娑婆世界の教主であります。私達の居住してるこの世界の真の教主である。即ち、導く人、救い取る人です。永遠の仏様こそが真実の仏様である。

他の仏様は、私達の真の父にはならない。真の父とは親子です。親子というのは血縁です。血縁とは血のつながりです。血のつながりをもちます。

法的には血が繋がっていません。親子ということはありません。社会的に親子ということはありません。

普通、親と子の繋がりは遺伝子の関係、血のつながりがあります。それは非常に強固なものです。

ところが、他の仏様には、親子の結縁ということはありませんから、私達の父にはならない。そして、私達の居住してるこの世界の教主でもありません。

教主というのは、それぞれの仏様は、どの世界で法を説いて、人々を導いていくか、ということが、それぞれのお経に説かれています。そのことを考えても、お釈迦様こそがこの娑婆世界の教主であり、他の仏様はこの娑婆世界の教主ではありません。

永遠の仏様にあらず。真実の仏様にあらず。これは先程、一番冒頭、Qの一で申し上げたことです。諸仏というのは、先程、分身と申し上げましたけれども、変化へんげした仏です。釈尊の変化した姿を化仏と言います。たとえ諸経で、諸仏の永遠性ということが説かれたとしても、それは、寿命品の久遠の釈尊とは意味が違います。

その例を挙げます。例えば大日如来ですね。大日如来は、ご存知のように真理を体とした仏様です。大日如来は真理身です。真理は、先程言いましたように、永遠、普遍です。普遍的真理ですから大日如来には永遠性が付与されている。永遠性という属性が付与されている。永遠という意味があります。ところが大日如来には、永遠の過去から永遠の未来に向かって修行をなさったりすることはありません。人々を導く修行をなさったり、功德をおもちになるということがありません。そういう意味で、仏様のお持ちになっている功德が、我々人々を導いていく上で欠けているということがあります。

先程からも出ておりますように、寿命品の仏様は、有限に即した無限ですから、そこに、具体的な人々との時間、空間の共有ということがあります。具体的な、我々の生活に即した慈悲の実践ということがあります。そういうものを大日如来は欠く、ということがあります。

或いは、阿弥陀様です。阿弥陀様は無量寿如来です。无量寿とは久遠という意味ですね。計り知れない命。寿は命という意味です。如来寿命品の寿の字も命という意味ですね。如来は仏様、寿は命、仏様の命、これが如来寿命品ですね。ですから、无量寿の仏様とは永遠の仏様ということですね。この永遠の仏様は修行と功德をもった仏様です。先程の大日如来は、その修行と功德、因と果をお持ちにならない、ところが、阿弥陀様には因果があります。永遠の因

果を説いている。それは、釈迦如来の永遠性に似ています。

ところが、阿弥陀様には、歴史上における、具体的な人々との時空の共有、即ち慈悲の実践ということがありません。それから、何よりも、先程から出ておりますように、寿命品の仏様は、娑婆世界の仏様、娑婆世界の教主、そして父子結縁なんです。それに対して、阿弥陀様にはそういうことがございません。即ち、父と子供との関係がない。仏と一切衆生の関係がありません。

そういうことから考えても、他の仏様は、久遠の釈尊と比較すると違いがある。

久遠の釈尊は、それぞれの人々の要求に応じて変現し、人々をお導きになる。それは方便教化です。化仏は方便教化。方便の導きである。方便とは仮という意味です。方便は仮の手段という意味です。

世の中には方便は嘘だという人がいますけれども、方便は嘘ではありません。もし嘘だったら方便とは言わない。方便というのは、真実を見通していなければいけない。真実を見通していて、真実に至らしめるための仮の手段として用いるのが方便です。ですから、真実を持たないで、人を欺いた場合には、これは方便とは言いません。方便とは、真実に至るまでの仮の手段ということでございます。

真実に導くための仮の手段としての教化、これが化仏の教えでございます。

次に、Qの七にまいります。何故、久遠の釈尊を信仰の対象にするのか。答え。久遠の釈尊は真実の救いを実現する真の教主であるから。真実の仏様、真実の教え、真実の救い、永遠の慈悲、それから永遠の浄土がそこにある。

皆様方が信仰なさるときに、何を信仰の対象にしますか。何を心に思い、何をご本尊として信仰なさいますか。何を信仰するかということが明確でなければ、信仰はあやふやになります。信仰は揺れます。

現今では、日本の多くの人は、別に信仰は関係ないです、仏教なら何でもよい、お葬式さえしてくれればよい、という人が非常に多いですね。信仰の重要性、宗教の本質、そういうものが、人々の心から遠のいてるように思う



のです。我々が人々にお話する時には、信仰の本質、何を信仰するのかということをお話しないといけない。

日蓮宗では何を本尊としてるのかというと、久遠実成の教主釈尊です。これを本門の教主釈尊といたりしますけれども、今日お話しております寿量品に説かれるところの、久遠の釈尊のことですね。寿量品に説かれるところの久遠の釈尊を、日蓮宗では本尊としていっているのです。

日蓮宗でも、公式に表現なさる時にはいろいろな表現があります。久遠の釈尊の救いの世界をどのように表現するか、という時に、ある時は大曼荼羅本尊、ある時には一尊四土本尊、一塔両尊四土本尊、或いは首題本尊と言ったり、種々の本尊のお姿をいうことがあります。それらは全て、久遠実成本師釈迦牟尼仏、即ち、寿量品の仏様です。この仏様の救いにあずかった、信仰者と仏様との一体化した境地、先程感応と申しましたけれども、一体化した姿を示したものが本尊なのでございます。だから、本尊のお姿は様々ありますけれども、その内実、本質においては、これらの本尊は一つなのです。

難しい話になりますので今日は触れませんが、本尊の本質は一念三千ということです。本尊の本質は一念三千、その一念三千の本尊をお祀りする。それが本門の教主釈尊です。或いは大曼荼羅、一塔両尊四土、一尊四土ということになるのでございます。今日は仏様のお話をしておりますので、真実の信仰の対象となる仏様は、この寿量品に説き明かされた久遠の釈尊であるということをご理解頂ければ有り難いと思うのです。

お釈迦様だけをお祀りしているお寺はないとお思いになるかも知れませんが、先ほど申し上げた本尊のお姿は、久遠の釈尊の救済の世界です。或いは久遠の釈尊が末法の人々を救うために、お題目をお示しになった、その法華経の教えの世界です。そういうものを具体的に本尊として表わしますから、種々のお姿があるのです。それら全て、本尊であることにかわりはない。

Qの八です。久遠の釈尊と仏様のお弟子との関係は。Aです。仏様のお弟子とは、久遠の釈尊が歴史上の釈尊とし



て出現された時のお弟子のことです。そうすると、歴史上の釈尊のお弟子は、即ち、広く言えば久遠の釈尊のお弟子ということになります。お弟子方は、歴史上の釈尊の弟子であるけれども、ひいては久遠の釈尊のお弟子として、久遠の釈尊の教化活動を助けておられる。或いは、久遠の釈尊の教化活動の一翼として、活動なさっている。このように理解してよいのではないかと思います。

お弟子方は声聞です。声聞とは声を聞くと言います。

声聞は大乗仏教では否定された、仏にならないと否定された存在だったので。

それが法華経では、声聞は成仏すると説かれた。これは法華経の前半に説かれている内容ですね。声聞成仏ということは法華経では繰り返し説かれています。成仏の約束を、仏教の専門用語でいえば、授記と言います。記別を授かったということです。

菩薩は、声聞より仏教の位としては上にあります。大乗仏教は菩薩仏教です。法華経は大乗仏教を代表するお経です。ですから、法華経はいままでもなく、菩薩の教えです。お経の中に、教菩薩法仏所護念と説かれていますように、菩薩を教える法です。法華経は菩薩法ですから、菩薩の救いということには当たり前です。

大乘諸經典で、二乗、即ち声聞が否定されたので、法華経は積極的に二乗の成仏を説いたのです。ですから、二乗も成仏する。即ち声聞も成仏する。そして菩薩も成仏する。このように、法華経は、全ての者は成仏すると説きました。

法華経は悉皆成仏の教えです。悉く皆成仏する。法華経は、全ての者は仏になるとしているのです。ですから、仏弟子は声聞なのですけれども、声聞も成仏するということになります。

そして、仏様の衆生教化の手助けをする。そういう存在として位置付けられる。

お自我偈の中に説かれている世界は一つです。私達の存在、或いは私達の使命、そういうようなことを説いてい

る。私という視点で考えれば、そういうことになるだろうと思うのです。

私達の存在というのは、私達は久遠の釈尊の世界に生きている、ということ。それから、久遠の釈尊の命を生きていく、ということ。私達は久遠の釈尊の世界を生きていて、久遠の釈尊の命を生きていく、ということ。私達は、

それからもう一つ、私達の使命です。私達の使命は、久遠の釈尊の御心に生きる、ということ。御心に生きるというのは、久遠の釈尊のお心のごとく生きていく、ということ。私達は、

そして、久遠の釈尊の本願を継承するのです。日蓮宗では、本願という言葉はあまり使いません。日蓮聖人も、それほどお使いになっていない。浄土教団では本願という言葉は非常に強くお出しになる。言葉の本来の意味は、本願の願です。

寿量品の一番最後のところは毎自作是念です。常に自らこの念をなすということ。ここに仏様の本願がある。どういう本願かというと、全ての人達に仏身を成就せしめたい、という願いです。

その本願を私達は継承しなければいけない。これは我々の使命です。仏様のお心のように生きるということは、仏様の願いの一翼を担い実現していかなければならない。

日蓮聖人はその範を示された。法華信仰者としての範を示された。日蓮聖人は仏様の命を生きて、仏様の願いを自らの使命として実現していこうとなさった。それが、日蓮聖人の立正安国の実現ということ。私達は、

立は立てる、正は正しいです。正しいというのは一般的な表現です。正法です。正は正法です。正法は正しい教えです。立正とは正しい教えを立てるということ。真実の教えを立てる。これは日蓮聖人の教えでいえば、法華経を立てるとか、題目法華信仰を立てること。そして、安国である。安らかな国になる。仏様の浄土がそこに実現する。即ち、法華経の題目の信仰を通して、本当の平安な仏様の世界を実現しましょう、これが日蓮聖人の立正安

国です。それが日蓮聖人の積尊本願の継承、実現、ということであつたわけです。

ですから、私共もそのことを自らの願いとして生きていかなければいけないと思うのでございます。

お自我偈は、先程から繰り返し申しましたように、仏様の永遠性を説いている。これが本旨です。ところが、仏様の永遠ということは、仏様の教えが永遠であり、仏様の浄土が永遠であり、仏様の救いが永遠である。そしてそのこととはひいては私達自身の存在もまた永遠である、ということなのです。そして、私達が本当の私達として生きる。人間としての有り様、真実の有り様というのは、そういう、仏様のお心の中に生きていくこと。それによって、本当の自分を実現するのです。

日蓮聖人は、数々の難にお遭いになった。それはご存知の通りです。ところがそれを、日蓮聖人は嫌つたかということ、日蓮聖人はそれを悦びとして受け止められたのです。法悦と仰っています。悦びです。どうして難が悦びになるのかというと、難が日蓮聖人にとっての自己実現です。日蓮が日蓮であるということなのです。日蓮が日蓮として生きる。日蓮として生きるということは単なる凡夫としてではないのです。積尊の中の日蓮、法華経者としての日蓮です。法華経を生きる者としての日蓮を、日蓮聖人は生涯の中で実現なさつたのです。

だから日蓮聖人は幸せ者なのです。これほどの幸せなことはないのです。仏様の命の中を生きていつて、そして燃焼されたのですから。

そういう生き方をなさつた。我々はそういう日蓮聖人を範として生きていかなければいけない。それが、日蓮聖人の教えを受け持つ者の生き方であろうと思うのです。

そういうふうなことを、私達自身の生き方の中に受け止める。これがお自我偈の教えをどう受け止めるかということなのです。

皆様方もいろいろなご縁があつて日蓮宗の教師になられたと思うのですけれども、日蓮聖人の教えは、とにかく、

大変なのです。どういう意味かというと、それは学解としての深さだけではなくて、学問的な深さだけではなくて、それに実践が伴うからです。

日蓮聖人の教えを追究し終わるということはまずないと思います。それはあたかも、仏教を人類が究明しうるかどうか、これは恐らく不可能かも知れない。仏教を究明しうるかどうか分からない。と同じように、日蓮聖人滅後、もう長い長い年数が経ったのですけれども、日蓮聖人の教えを本当に究明しうるかどうか、それは分からないと思います。何年経つても分からないでしょうね。我々が今理解していることは、本当に日蓮聖人の真意かどうか、それさえも分からない。日蓮聖人に聞くしかないですから。それはもう、本当に真摯に日蓮聖人に尋ねるしかないのです。

そういう中に皆様、身を置いているのです。いくら日蓮聖人の法門をたずね、たずねていつても、それが本当に正しいかどうかは分からないのですね。それほど大変な法門なのです。

そしてそれをまた、日蓮聖人は口で言って頭で考えて、文章で書いて終わったのではないのです。それを身で実践されたのですから。身で実現されたのです。それがまた大変なのです。

日蓮聖人のような生き方は、我々は理想の姿として見ているのですけれども、そのように私達が生きるとなれば、これはまた大変なことなのです。

それは法華経自身が難信難解と説いているのですからね。難解難入未曾有法だと説いているのですから。仏様が、そのように仰っている。

それから、今日の話の寿量品の冒頭は、汝等当信解です。寿量品は汝等当信解なのです。汝達まさに信解すべし。信解すべしという宗教なのです。信解というのは、信によって入ってこいということなのです。

方便品では、未曾有とか難解難入と仰っている。これは君達には分からないよ、と仏様が仰っているのです。それは化儀けぎと言って、法を説くための儀式をなさっているのです。

寿量品の冒頭は三回繰り返されている。信解すべしというのは命令です。それは普通の理解ではだめだからです。信の理解です。信の理解によって、初めてこのことが分かると仰ったのです。

それはそうなのです。なぜかという、これは本門の世界だから。即ち、久遠実成の世界です。久遠実成の世界は先程申しましたように永遠です。永遠は、我々には分からないのです。これはもう、信でしか分からないのです。信でしか、久遠の仏様を受け容れることができないのです。先程申した通りですね。だから、信ということを強調されている。信解なのです。

それでは私達が、この寿量品の仏様の教えをどう信解できるか、ということが我々の課題ということになります。それは、私達が、直接寿量品に当たってもだめなのです。我々が一所懸命勉強しても、それは我々の眼鏡で見てるのですから。必ず日蓮聖人という導師を通して受け止めなければだめです。日蓮聖人の宗教は日蓮聖人の教えを通して受け止めなければならない。だから日蓮聖人はどうご覧になったのかということ、日蓮聖人にたずねなければならぬ。日蓮聖人の教えを通して初めて釈尊の心を知るのです。それが我々の法華経信仰の有り様です。我々が勝手に理解した法華経信仰は、日蓮宗の法華経信仰ではありません。これは、AさんならAさんの個人的な法華経信仰なのです。常に我々は日蓮聖人を通して、法華経の教え、釈尊の教えを知らなければいけない。それが日蓮宗の信仰だと思います。

そういうことで、お自我偈の概略的な内容についてお話を申し上げました。

続きまして、次の資料は、如来寿量品第十六、即ちお自我偈の本文と、その現代語訳です。これを参考にしていただいて、如来寿量品に何が書いてあるかを確認していただきたいと思えます。下の段をご覧ください。

自我得仏来の我というのは仏様のことです。私釈尊が、悟りを開いたのは量り知れない昔であり、常に法を説いて多くの人々を教化して仏道に入らしめた。



これは、一般向けの説明をしていますので、過去に悟りを開いたと訳していただけますけれども、本当は過去に悟りを開いたのではないのです。本来悟りを開いていたのです。しかし経文では、長い長い年月が経つた、というたとえになつてますので、そのように訳しています。これが仏様の久遠の成道、久遠の仏という意味ですね。

常に法を説いて多くの人々を教化して仏道に入らしめた。仏様は多くの経典、つまり諸経をお説きになつた。そして人々を仏の道に導いた。それらの教化というのは、先程も申しました通り、方便教化です。諸経は方便教化、そして、今この法華経を説くことによつて、真実の仏の教えの世界に人々を導かれるのです。

人々を救わんがために、方便して入滅の相を示した。これは仏の死ですね。入滅は死です。

真実には人々とともに住して法華経を説き続けている。仏は死ぬということを示すけれども、それは人々を導くための方便であつて、本当は死ぬことはない。そして、常住此説法、常にここに住して法を説く。

心の迷つた人々を救うために、肉身の入滅を示し、人々が信仰の心を起こし、仏を願つたならば、私は多くの弟子とともに靈鷲山に姿を現わす。これは、先程も申しました、歴史上の釈尊の入滅です。

良医の譬えの中では、お医者さんのお父さんが、旅先から使いを遣わして、自分の死を子供に告げた、とあります。

このお自我偈はそういう内容から考えて、その前にあります散文の内容を受けている。

法華経はいつどのようにして成立したのか、という成立史の問題があります。この寿量品を見ますと、前の文を受けています。良医の譬えのことも出て来ます。散文を受けてこちらの偈頌ができていて、ということが分かります。

靈鷲山に姿を現わす。靈鷲山というのは、仏様が法華経をお説きになつた場所です。これはインドの、具体的に存在する山、現在も存在する山であります。インドに、仏跡参拝する方、法華経の信仰をしている方は必ず靈鷲山にお詣りになりますけれども、法華経だけではなくて、多くの仏教経典がこの靈鷲山で説かれたのですね。ですから、靈

鷲山にお詣りしてお釈迦様を偲ぶということが今でもなされているわけです。

その靈鷲山が、法華經の信仰者の理想の浄土というふうに見えるわけですね。日蓮聖人もそう仰っている。この靈鷲山を浄土と考えることは、日蓮聖人以前からあります。それは、お釈迦様に対する絶対的な神聖視ですね。お釈迦様が法を説かれた場所は聖なる場所であるというふうに考えます。それはあたかも、例えば身延山久遠寺は日蓮聖人の棲神の地である、神たましいの棲すむ場所であるといえます。身延山久遠寺が聖地化されていくのと同じです。説法された靈鷲山が、聖地としてあがめられる。日蓮聖人もこの靈鷲山を、浄土とされた。

しかしこの浄土は、インドに行かなければいけないのか。そうではないのです。法華經信仰者の理想の浄土として靈鷲山をご覧になってますが、インドの靈鷲山を言っているのではないのです。

先程、娑婆世界が浄土だ、と申しました。娑婆世界が浄土であり、そしてまた靈鷲山が浄土である。両方がともに浄土です。それはどこにあるかという点、娑婆世界も靈鷲山も信仰者のその信仰の世界にあるというふうを考えているのです。信仰の場所が浄土であるという考えです。ですから、生きている時にも浄土、死んだ後も浄土です。死後にいくことを往詣という。そこに往って詣でる。死者の実感ですね。死んだ者が浄土に往って仏様に詣でるという実感をそこにお示しになった。往くと言っても、他の場所にいくのではないのです。この世界が、まさしく娑婆世界の浄土であり、靈鷲山の浄土である、という考え方なのです。

この考え方は親鸞聖人にもある。法然上人の浄土観は、此土と他土です。此土はここ、他土は向こうです。この娑婆は穢土である。穢土とは汚れた場所です。西方極楽浄土にいくと言えば分かりやすい。法然上人の宗教は分かりやすいのです。ところが、親鸞聖人は、西方浄土はどこかかという点、専門用語では四方立相という。四方は東西南北です。東西南北がその場所ですと言っているのです。即ち、自分がそこと思う場所、それが西方極楽浄土だと言っているのです。それは言葉を変えれば、娑婆即浄土です。法華經と全く同じですね。自分がいるこの場所、仏と共に実感

する場所、そこが浄土と言っているのですから。西方に極楽浄土があるわけではない、自分が仏と共にあると思つた場所が西だと言っているのです。ですから、非常に信仰が自分に引きつけられている。つまり自分の主体の中で信仰を考えているということがよく分かります。

日蓮聖人も多くの門下の方達に、死後の安らぎの場所として、靈鷲山ということをお書きになつて居るのです。靈山浄土です。

更に私は、次のように人々に語る。私は常に人々とともにあり、滅することはない。これが先程から申しています。仏様は不滅であるということです。人々を教え導くために仮に入滅の相を示す。ある時は不滅であると説く。人によつて、ということです。

他の国に仏を敬い、信じ、願う者があるならば、私はまたその国土におもむくだろう。どこの場所でも行く、どの場所にもいる、ということなんです。

国土とは場所ということですけども、仏教の宇宙観にはいろいろな場所がたくさんあつて、それぞれに教主が現れて法を説くと考えて居るのです。ですから、多くの仏様が居る。

諸仏が居るといふのは大乘仏教の特色です。それに対して、南方仏教、要するに上座部仏教といわれる仏教では、一仏です。一仏といふのは釈尊、歴史上の釈尊しか認めない。

人々は、このことを知らないで、ただ仏は入滅すると思つて居る。私から見ると、人々は迷妄に閉ざされ苦しみの海に沈んで居る。

これが毒氣深入です。毒が深く身体に入つてしまった。或いは顛倒てんどうの凡夫です。ひっくり返つて居る、という譬えになつて居ます。

従つて、私は入滅の相を示して人々に仏を求める心を生ぜしめるのである。人々が仏を恋慕するようになれば、私

は姿を現わし、人々に法を説く。

これは、仏を求める人のところには仏はいる、ということですが。歴史上の仏様には、会った人もいれば会わなかった人もいます。お釈迦様の在世に生まれた人は幸い仏様に出会った。それでは、仏様が入滅された後の人は仏様にはもう会えないのかというとそうではなくて、仏様を願う、仏様を思う者、仏様を慕う者、仏様を信ずる者の前には仏様は姿を現わすのです。どこにでも仏様は現れるということなのです。

そこで、仏の不思議の力とはこのようなものである。これは、仏様の不思議な力ですね。仏の不思議な力ということ、これはもう人々には分からないのです。

永い間、私は霊鷲山及び他の諸の場所に常にいる。世界が破壊され、人々が焼き尽くされようとしてる時でも、仏の世界は安穩であり、多くの天人が楽しく過ごし、花園や樹林、種々の宝で飾られた堂閣、宝の華や果実をつけた樹木が多くあり、人々は遊樂している。諸天は鼓を打ち、種々の音楽を奏で、仏や多くの人々に白蓮華を降らす。このように、仏の世界は美しく輝いており、決して破壊されることはない。

これが永遠不滅の浄土。仏様の世界は永遠不滅の浄土です。観心本尊抄に示された「今本時の娑婆世界」でござい  
ます。

しかるに仏の世界に気付かない迷いの人々は、この世界は焼けつき、多くの苦悩に満ちていると思っている。このように罪深い人々は、悪業の因縁によって、永い時間を経由しても、三宝（仏法僧）の名前さえも聞くことができない。

仏教は何から始まったのかというと、苦です。仏教は苦から始まったのです。この世の中は苦しみに満ちている、ということから始まったのです。それが現実の認識なのです。我々もまた苦の中に沈淪している。その苦からどう逃れるかということが仏教の始まりです。仏様は苦から逃れる道を悟ったわけですね。それが本当の自己のありよ

う、ということなのです。

苦しみは、求めても得られないとか、いろいろな苦しみがありませんけども、最終的な苦しみは生滅の苦ですね。お釈迦様は生老病死と説かれました。生は生まれる、そして老病死です。生まれることがあるから死ぬことがあるのです。生まれて、良かった良かったと言って言っていたと思ったら、時間が経過して、もうご臨終です、になってしまふ。

それは何かというと、限りがあるということです。有限です。老は変化です。人間は生まれたら成長する。それは老、或いは死に向かっていく、変化していくのです。全てのものは変化していく。ですから、そういうものは苦です。何故ならば、最後の死は自己消滅ですから。自己が消滅する時をどう乗り越えるか。このことで、大勢の人達が悩んだわけですね。永遠の命をどうしたらもらえるか。富士山を死なない山と考えて信仰したり、不老長寿の薬がほしいと言ったり、死んだ後も永遠に皇帝でありたいと、地下に都を造った人もいます。とにかく自分は死にたくないみんな考えたのです。その死にたくないということは最大の苦しみです。全ての者がこの苦しみを抱くのです。

その苦しみを如何に乗り越えるか。仏様はそのことを悟られた。死が当たり前であれば、死は苦しみではなくなる。

一方、諸の功德を修し、我執を離れて、心が柔和で素直な者は、仏がこの国土（娑婆世界）にあつて法を説くと見るのである。

仏様の教えを素直に受け容れることのできる者は、仏様を見ることができなのです。

またある時は法を求める人々のために、仏の命は限りがないと説く。久しい時が過ぎて、いまようやく仏に会うことができた者には、その人々を導くために、仏には会い難いと説く。

仏様に会っても、仏様には会い難い。仏様に会った、仏様を見た、仏教を信仰した、と思つても本当に仏様にほん



とうに会ったのか、ということがまた問われるのです。ほんとうに仏様を信仰したとは何かと、仏様に会ったとは何かと、自己に問うと、仏様に会っていない自分に気付くわけです。そのことの繰り返しですね。だから仏様には会い難い。それはまさしくお題目と同じで、お題目は、唱えることは容易いけれども、本当にお題目を唱えることは、非常に困難です。仏様を思う人のところには仏様はいると言いながら、仏様を思ったからといって仏様はいない。仏様には会っているけれど仏様には会ってない。

仏の知恵の力とは、先程いきました不思議の力です。仏の知恵の力はこのようなものである。知恵の光は限りなく、寿命は永遠である。それは久遠の過去よりの修行の積み重ねによって得たものである。

これは先程出て来た、因と果ということですね。仏様は永遠の過去から永遠の未来にわたって存在し、そして永遠に修行を積み重ねておられるということですよ。

あなた方知恵のある者はこのことを疑ってはならない。永く疑惑を断じつくすべきである。仏の言葉は真実であって決して虚妄ではない。

仏の教えの真実性ということですよ。

それはあたかも、父の良医が、毒を飲んで苦しんでいる子供を治癒せしめんがために、方便をもうけ、真実ではないのに自分の死を子供に告げ、良薬を飲ませることが、虚妄の罪に問われないようなものである。

これは先程の良医の譬えのことです。

私もまたこれ世の人々の父であり、人々の諸の苦しみを救う者である。煩惱に執着する人々が迷いの心を起すゆえに、真実ではないのに入滅すると説くのである。

人々の真の救いを成就する、即ち、拔苦与楽です。苦を抜き楽を与える。拔苦与楽が仏様の仕事です。仏様は世の父です。

私が常にこの世にいと、人々はいつでも救われると思ひ、憍慢の心を起こし、怠惰となつて欲望に溺れ、悪道の中に墮落する。

地獄道、餓鬼道、畜生道に墮ちるのです。人間とは怠惰なものです。人間とはそういう存在なのです。人間は憍慢であり怠惰な存在です。要するに奢りたかぶり、そして怠け者だということですね。人間はまず奢りたかぶる。これは慢心というのです。慢心を如何に除くか、これは生涯の課題です。

私は常に人々が仏道を修行したり怠つたりすることを熟知するゆえに、導利すべき情況を見定めて、種々の法を説くのである。

これが方便の説法です。諸経の説法のことです。

毎に私はこの思いの中に生きている。どのようにして人々を無上の教えの世界に入らしめ、速やかに悟りを開かしめ、仏身を成就せしめようかと。

如何に人々を救い取ろうかということをお私に常々考えている、このように仰つておるのでございます。その最後の毎自作是念とあるところが、毎自悲願で、仏様が、如何に一切の人々を救い取ろうかとお考えになつてるといふ文です。毎自の悲願、毎に自らこの念をなす、ということ。そこに我々の救いが成就するので。

ですから、昔の人はこの毎自作是念の文を破地獄の文といったのです。地獄に墮ちた時に、この毎自作是念の文となえると、地獄から戻されるというのです。それほど、仏様が、人々を救おうとする偉大なる願いを込められたというのでございます。

無上道とは、上のない道、最高の道ということ。これは、ご存知の宮沢賢治さんが好んで使つた言葉です。

以上が、寿量品第十六の現代語訳です。皆様も噛みしめていただいて、信解体得し、その信仰の表白表出として、人々を教化して下さることが望ましいと考えるのでございます。

三点目の資料は、今日お話し上げたこととほぼ同じようなことが説明してありますので、時間のある時に読んでください。これは大法輪閣が数年前に出した『仏陀・釈尊とは』というタイトルの書物の中の、日蓮宗の部分を私が担当致しましたので、その時の文章を参考のために皆様のお手元にお配りさせていただいたのんです。喋ったことは消えてしまいますから、それをもう一回噛みしめて頂くためには、これをまた読んでくださればよい。そのためのものでもあります。

皆様からハガキで寄せられたご質問について、私の思うところを少し述べさせていたただきたいと思しますので、よろしくお願い申し上げます。最初に項目だけ挙げます。どのような質問があるかということも挙げて、この後、それぞれについて申し上げていきます。もしかするとご質問の趣旨を違えて、私が受け止めているかも知れません。その時は仰ってください。全部で十四あります。

一、寿量品の訓読を僧俗で繰り返し読誦することを勧めたいと思ってる。そのことについてどう思いますか。二番目、自我偈は久遠本仏の生命と衆生救済のはたらきが説かれてると習いました。三番目、お題目を唱えると、宗派を超えてどのように功德がありますか。四番目、久遠本仏と私達の命の繋がりとをどう捉えたらよいですか。五番目、久遠本仏の实在をどう説明すればよいですか。六番目、「質直<sup>しちしき</sup>」の文が二箇所出てくるが、その解釈はどのようなか。仏に会う条件として大切と思われる。七番目、通仏教と本化仏教、その境界線は、表現的にはどのように異なるか。八番目、何故お題目を唱えるのがよいのか。九番目、合掌の大切さ。十番目、大学で身につけた教学をどう信徒に伝えていったらよいか。十一番目、今の時代にどう布教すればよいか。十二番目、子や孫への教化は難しい。どうすればよいか。十三番目、先祖供養の意義・必要性をどのように伝え、教化すれば檀信徒の心に浸透するか。十四番目、未信徒への教化の本を紹介してください。

ほぼこのような内容です。文章通りではありません。先程控え室で見せていただいて、メモを取ったのです。皆様

方のご質問通りの趣旨かどうか分かりませんが、私の受け止めた範囲でのご説明をさせていただきます。思います。

まず最初、寿量品の訓読を、僧俗で繰り返し読誦することを勧めたい。

お経には、ご存知のように真読と訓読とがあります。真読とは漢文で読むことです。訓読とは読み下しで読むことです。この二種類の読み方がありますけれども、それを、訓読を僧俗で繰り返し読むことを勧めたいというご意見です。

真読と訓読のそれぞれの持っている性格があります。真読のほうが有り難いという人も中にはおられます。それから、訓読のほうが内容が分かりやすくてよいという方もあります。真読か訓読かは受ける人によつて違いがあるとあります。

私は六年前にあるご高齢の方から、お経は、檀信徒と一緒に読む時は訓読で読むべきだと教えられたことがあるのです。その方は訓読という言葉を知ってるくらいだから、よほど分かっていたのです。その方のお家の法事の時は、お詣りにみえた親戚の方とかに、ご本人が訓読で読むべきだと仰っていますとお話をするのです。

私は、普通、お寺で葬儀とか法事でお経を読む時は全て訓読で読んでいます。そのほうが内容を理解しやすいと思うのです。その方が仰ったからではなくて、それ以前からそうしているのです。

場合によつては、檀信徒の方と一緒にでも真読で読むこともあります。どういう時かというところ、私は毎月研修会をしているのです。その時にみえる方は皆さん分かっている。法華経の話毎月しているのですが、その方達は分かっている。真読で読んでも分かっているということ、なるべく講義の時間もとりたいから真読で読みます。皆さんもついてきます。

このように、その場その場で対応することが必要でしょう。

それから、繰り返しということですね。繰り返しに意義があると思うのです。人間は繰り返すことによつて、だんだんとそれが身についていく。分からなくても分かつていくということがあります。

昔ある方が仰つていたのですけれども、浄土真宗の研修会に参加することがあつた。それで感動したと言つて帰つて来られたのです。老若男女いろいろな人が来ていて法門を開く。ご存知の通り浄土真宗は聞法の宗派ですから、法門を聞くということが、重要な信仰活動になつてゐるのです。ですから高度な話をされるのです。大学とか大学院クラスの話をする。それで、隣のお婆ちゃんに、何を言つてゐるのか分かるのですか、と質問したら、そのお婆ちゃんが、いや分かりません、と。分かりませんけれども、これが有り難いんですと言つた。それでもう参つたと言つたのです。分からないけれども有り難いというところに、そのお婆ちゃんは信をおいてゐるのです。そういう信の置き方もある。それには太刀打ちできない。理屈でものを考える者には太刀打ちできない。何か分からないけれども有り難いという人もいます。

要はそのお経を読むことで感激することです。喜びを得ることです。感激、喜び。そのことが、信仰を持続させるのです。それがなければ、つまらないと思つたらやめてしまいますよ。そのことを通して何か感動した人は、いつまでもいつまでも、その世界に入つていますよね。そういうことだと思つたのです。何かしようとした時に、つまらないことはすぐ嫌になります。ほんとうに自分でやりたいと思つたことは、繰り返し繰り返しする。だから感動がなければならぬと思つたのです。

そのためには、お経にはどういうことが説いてあるかということの説明が必要な場合もあると思います。いやむしろそのほうが多いと思います。何か分からなくても感動するお婆ちゃんもいますけれども、分かつて感動する人は、次の人にそれを伝えることができます。伝えることができれば、大勢の人達が布教師になるのです。お坊さんが一人で布教しても、たかが知れてゐる。そのお坊さんが檀信徒を教化し、その檀信徒がまた次なる人を教化していく。こ



れを繰り返していけば、法は広がります。お坊さんだけが納得して、喜んでいてもダメなのです。

二番目です。自我偈は久遠本仏の生命と衆生救済のはたらきが説かれていると習いました。これは今日お話したところですが。全くその通りでございます。

三番目、お題目を唱えると、宗派を超えてどのように功德がありますか。

先程申しましたように、お題目は、諸仏、諸経、諸功德の根源です。他の宗派で御利益があると仰る方がいても、そういう御利益もまたお題目の御利益なのです。法華経は、広く全てを包み込む宗教なのです。ですから、それらのものはもう全然うちとは関係ありませんではなくて、それもまた、法華経のお題目の信仰の一つですよ、ただそれとどまつていてはダメですよ。それは方便権経なのです。仮の教えですから。それを通して、更なる深い世界に行きましよう、こういう導きが必要です。

日蓮聖人は、体内の権ごんと仰っている。日蓮聖人の時代にはお念仏が盛んでした。そのような念仏信仰の人達に対して、念仏は権、仮の教えであり、法華経の題目の信仰の体内の教えだと。体内とは身体の中の一部です。広く抱き込めばそうなる。ただ、抱き込んでお終いになりますと、ほんとうのところへ行きません。方便のところが終わってしまいます。それを如何に真実の世界に導くかということです。方便から真実へと導くのです。

四番目、久遠本仏と、私達の命の繋がりとをどう捉えたらよいか。

これは、私達自身が久遠本仏の命を生きているということ、私達が存在するということ、私達が今ここにいるということは久遠本仏の實在なのです。私がいることが久遠本仏の實在と理解すれば分かると思います。久遠本仏はどこか他にいて、どのようにしているのかしらと思うかも知れませんが、我々がこうして生きているこの環境にしても、我々自身の命にしても、それは久遠本仏の世界を、久遠本仏の命の中で生きてるのです。私自身が久遠本仏の一分身、姿、現れです。

五番目、久遠本仏の实在をどう説明すればよいか。これも先程と同じようなことだと思うのです。人様に説明する時に、貴方の命は久遠本仏の命ですよと言ってもなかなか理解してもらえません。やはり生きてるその在り方ですね。感謝、そういうことを通して、自分自身の存在の有り様に気付いてもらう。大いなる命の中に生きてるということとを気付いてもらう。題目信仰は、人々をそういう方向へ導く手だてにもなるのではないかと思います。

六番目、「質直」の文が二箇所出てくるが、その解釈は。仏に会う条件として大切だと思う。

「質直」は正直という意味です。質直にして心柔和なる。心が柔らかい。何に正直かというところこれは、仏様に対して自分が正直であるということです。仏様に対して素直な心を持つということです。仏様に対して素直というのは、疑わないということです。疑わないということは、信じるということです。

人間というのは疑いの動物ですから、疑わないことはまず出来ないのです。約束しても必ず疑ってしまうのですね。完全に相手を信頼していれば疑わない。信頼が少しでも揺らぐと疑う。疑わないとは信頼することですよ。

「質直」とは素直に仏様と対面している、仏様を受け容れているということです。それは信ということだと思いません。

七番目、通仏教と本化仏教との境界線、表現的にはどのように異なるか。

通仏教と言った時は、対極にあるのは宗派仏教ですね。宗派仏教というのは、我々は日蓮宗ですけど、何々宗の仏教です。

仏教にも色々な仏教があります。地域の仏教もあります。中国仏教とか、インド仏教とか、日本仏教。時代の違いもある。それから、お釈迦様のお経はどうか、何が説いてあるのか、お釈迦様の生涯はどうか。科学的に究明する仏教もあれば、習慣的な信仰を媒介として、教えを理解しようとするものもある。要するに宗派の仏教は、信仰としての仏教です。通仏教は、人間の生きる道、哲学、教養、学問として仏教を見ようとする事です。

本化仏教は、仏様の久遠教化を受けた菩薩方の仏教です。これがまさしく日蓮宗の仏教です。日蓮宗の仏教は、如来寿命品で現された、久遠実成の本師釈迦牟尼仏が、良薬で示された久遠の大法であるお題目を、如来神力品第二一で、従地涌出品で涌出した本化地涌の菩薩、特に上行菩薩を中心とした地涌の菩薩にお与えになった、即ち付属された法華仏教なのです。これを本化仏教というのです。それは、法華経全体の仏教ではありません。久遠積尊が久遠本法を、久遠教化の本弟子である地涌菩薩に付属された仏法です。これが本化仏教です。そのことは、ご質問なさった方は十分ご理解しておられると思います。久遠の仏が久遠の弟子に久遠の法を付属した、ということですから。これが本化仏教という意味です。

八番、何故お題目を唱えるのがよいのか。

お題目は、先程申しましたように、仏様の全ての功德を結集したもので、全ての教えを結集したものです。仏様の教え、仏様そのもの、仏様の功德、あらゆるものを全てそこへ結集したものです。これがお題目です。ですから、何故お題目を唱えるのかというと、その偉大なる功德に対して帰依する。それは久遠の積尊に対する帰依です。お題目を唱えることは、久遠の積尊を頂き、久遠の積尊の命を生きることになります。

九番目、合掌の大切さ。

合掌というのは、手を合わせるのですが、手を合わせるのとはどういう時かというのと、感謝です。お礼や感謝の心を示す時です。感謝の心を示すのは、生かされている自分に気付く、生かされている自分を表現することです。合掌は無抵抗という意味もあるということです。合掌は仏様と自分との心を合わせていくことです。世の中には合掌の運動をなさってる方もいます。合掌の会。よく合掌なさる方もいます。それは、感謝の気持ちを持つて生きていきましよう、ということなんです。そういう意味だと思えます。だから大切なことだと思えます。

十番目、大学で身につけた教学をどのように信徒に伝えていったらよいか。この後のことと同じですが、生活に根

ざした伝道をしていかねばならないと思うのですよ。大学で学んだことは教理です。その教理を基盤として、いかに法を説くかということ。それをいかに自分の中で深めて伝えられるか。大学で学んだことはほんの少しです。大学で学んだことは、学んだうちには入らない。大学で学んだことは体系の概要と、どんな本があるとか、どんな先生がいるかということを知った程度です。あとは自分で勉強するのです。自分で学んで、日蓮聖人にたずねる。そして、それを基盤として日々、日常生活の中で人に伝えていくことがなければならぬ。

十一番目、今の時代にどう布教すればよいか。

時代の動向を正しく知る必要がある。今はどういう時代でどういうことになっているのかということを知らねばならない。お坊さんはお経さえ読んでいけばよいわけではないのです。お坊さんは世間のことを知らないダメなのです。世法を知るです。法華を識ることは世法を知ることです。教えをどのように自分が受け止めて、それを社会にどう実践していくか、ということが大切ということ。す。

これからの時代は、必要とされるものは残ります。必要とされないものは残りません。仏教も同じです。恐らく仏教は残ると思います、仏教は不滅でしょう。仏教は人類の叡智です。ただ仏教教団は残るかどうかわからない。仏教と仏教教団が一つなら残るでしょう。これからは日本も人口が減少をたどっていきます。ですから、必要とされるものは残り、必要とされないものは残らない。必要でないものになってしまったらアウトなのです。人々にとって、本当に大切なもの、必要なものにならないといけない。それは経済的とか物質的という問題ではないのです。人々の心を如何に豊かにするか、人々に如何に満足を与えることができるか、そういう宗教でなければこれからは生きていけません。

それで、どのように布教するのかというと、時代を見据えて、そして人々と共に歩む。お釈迦様もそうなのですか。人々と共に歩むという視点に立たない限りは、人々の心に仏教を訴えることはないだろうと思います。それはも

う、以前から言われてるのですけれども、大きな曲がり角にきているように思います。